

研究概要

医学部1年のプロフェッショナリズム醸成 ⇒ 早期体験実習が有効であるが課題を抱える

- **短期間 or 一回のみ実施**: 多忙なカリキュラムの合間に実施せざるを得ない
- **受動的に実習が終わる**: 多くの学生は実習を“見学”で終える

⇒ 本研究: **早期体験実習 × 医療安全実習** を実施

- **狙い**: 医療安全推進のために必要な**実践的なスキル**を身につけること

1 「早期体験 × 医療安全」実習の概要

※本研究は、自治医科大学臨床研究等倫理審査委員会の承認を得て実施した(臨大18-014号)。本成果の公表に先立ち、学生に研究目的・内容を十分に説明し、同意を得ている。

実習目的:

1. 医療者や患者に関する理解
2. 医療を学ぶ意識の高揚
3. 医療安全に関する意識向上と理論の実践

従来目的

コンセプト
実習中に学生が**安全巡視**する
臨床での安全上の問題点を発見させる

実習方法 (対象: 入学3カ月目の医学部1年生123名、実施: 2019年6月)

実習2週間前 (巡視の練習)

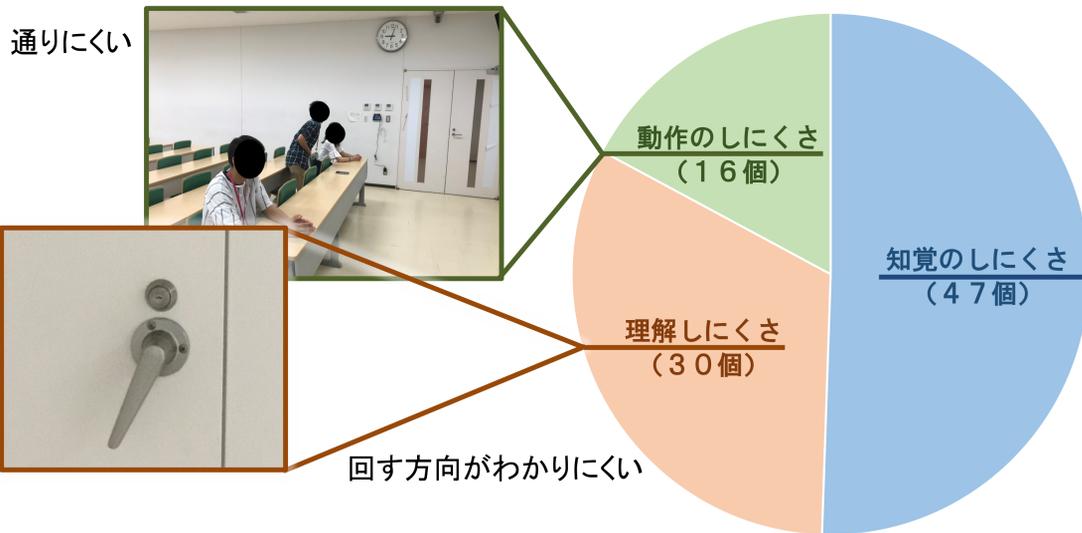
教室や校舎等を巡視させ、間違いやすい、作業しにくいものを写真で記録

実習当日 (院内での巡視)

病棟や外来にて、個人で3つ以上、安全上の問題点を探させ、レポート報告

2 実習での学生の問題発見傾向と、その例

実習前の巡視の練習結果



◆ 多くの学生が、案内表示や物の見つけにくさに焦点を当てた。



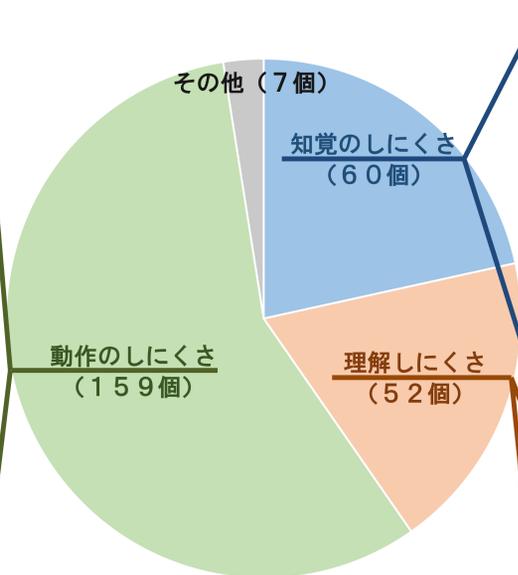
早期体験実習(臨床)での巡視結果

小児科病棟で、赤ちゃんの世話をしていた母親が、医療機器の配線に度々つまづきそうになっていた。まとめたり、通り道にならない所に移したりできないものかと思った。

正面玄関前の受付で、車椅子で来た患者さんが受付を終えたあと、方向転換するのに苦労していた。

会計をする機械が出口とは反対側にある。出口側に設ければ人の流れがスムーズになるのではないか。

廊下に配膳車や配薬カートが置いてあり、看護師がベッドを移動させにくそうだった。



「防火扉、物を置かないでください」という表示が、黒字で小さく、見えづらい。

院内の通路の交差点にミラーが少ない。歩行者だけでなく、車椅子やストレッチャーも通行するため出会い頭の衝突が発生する可能性が高い。

呼び出し端末の音が全ての患者さんに共通していて、誰が呼び出されたのかわかりづらそうだった。

小児病棟の冷蔵庫に「アレルギーに注意してください」と張り紙があった。子どもは理解できないのではないか。

終わった創立記念日の休診の案内が掲示されており、混乱を招く恐れがあると思われた

◆ **約9割が、患者に及ぶ危険についての観察であった。**
⇒ 実習中も、医療者よりも患者としての意識が高い可能性

多くの学生が、“患者の立場から”安全上の問題を詳細に考えることができた。

- ✓ 早期体験実習の目的である「(医療者・)患者に対する理解」「医療安全に関する意識」を深められた可能性

3 患者と医療者の危険をバランスよく観察させるために...

- 学生同士での意見交換の場を設ける : 医療者の危険(26個)についても、目を向けることができる。
- 高学年での臨床実習と紐づける: 高学年は医師目線になる傾向がある。学年をまたいだ意見交換が必要。